

和

目
二

490.4
Or-3
2

No. 111



富士川文庫

787

和蘭醫話

下



和蘭醫話 下之卷

筋ハ軟骨トカノ話

門人 横池 周 筆記

富士川家藏本

一筋とゆきの漢人も往々後にて人の屈伸と用ひてやそのたゞ平
作もあつてはるをいづきの所より根さしめおと哉

筋ハ甚まれ易とわふ以根幸肉の裂くもそのめくも頭後遠くも

くと一後あつて魚骨なる肉の中も硬くて骨牙と硬く定むる

や肉が筋より多いのいふと云ふも肉より筋より云ふも及ぶ

も端ハ硬くも平ハ柔らなるも一後一後能たれはけ筋を平に

よふちどわつておわりの其軟うたつて肉を硬く筋とわつて筋ハ軟骨の

ぶくぬく其軟骨はだんて剛骨の硬くたつて筋の軟骨の

軟骨もく骨體未だ成就せぬうちハ腦蓋骨ありあはを成長させし
 骨の犬牙様なる所お交り集りて硬骨とならぬを同埋なるもの
 老人も筋が骨の接りぬるおぬるが屈伸自立するん腰うづりて伸
 むの蘭書才老の人型像のごとくたること此の骨ももしく
 外人がうづ飲食を口のうづり入るる養ふの事たることありこれ
 ハ骨のそなる付着人の話説ふもあれと同一の事なること
 もケ格よわらうといふ事と一交りぬ

猶林九阜又やう語

一 来船乃蘭人食くこと此者識者の格也余其以擇て我に事
 むらひい

不偏も初年ハ唯々格々事々友友不絶と後ハ合兵ありて世も
 和堂此輩ハ令々俗説夥々事々是とるを不偏がな言を信し一
 能私論よともつてさういふ人もあつたがたつよ一信し

餘港の唱蘭譯士猶林十兵衛 名通字達又号九阜 不偏が旧通家の頭あり先年

公命より船乗り下向し己未冬内定の時浪速に滞留ししに不偏も浪
 速に寓居しし事なるがその逆旅に数往を臂と交うら無く譚ト以評不
 偏等とを船来の蘭醫を彼等の醫典とことごとく讀熟しし人ありや

うが九阜谷といはくそれをなぐ先吾地東都ハ措きて其他諸國より
 来せし所の阿茶陀流の醫と稱し顔の茶をせのふを唯譯し
 再將傳とせらるるそれゆゑあの名に茶を茶稱あり羅甸稱も交り一軒

らぬ多うたといふ馬士が保氏物語に云くは或文をきくふかたは雅俗
 混乱る稱呼言へり其譯士といふものも言語の業は通せざり事
 なること業を食へば復し解し得るもの多し其れ故に通の心も伊勢
 能海士も言語ハ 日能本の言語通せんといふ事をもて國をよき解
 といふ事ハ甚難とて曰ふ事之業人もこれよき事といふべし文盲なる
 もあることと年廿上英雄人を欺くの後多し其口吻の 吾語は後離せ
 ること業語をもて奇貨とて二三の業語をよきものを俗人其醫を
 能業をも解する人なるといふこと思ひよる其れをわくと一日我
 才橋本宗吉 名直政字伯敏 を提携して業書あはせしむる後を試すも
 一といひし頃又その子孫市郎 插林の其業 小命とて行中より一幸

をよす伯敏を乳をとりて左の標紙皮をひきと一寓用する不偏が徒を
 愛とあれ我兄が書きたるのさなり「ロイケル」キと名くる物あり遠
 征備用方といふべしこれより一二張を翻してあまき讀む事流水の
 あく其解譯とて事恰も宿看のその如く九阜父子相互に牽徒して
 以て吾曹此も衣食とてそのものおとく捷敏なる稀なる愧
 しくと稱しやまふは不偏信みく教しく同學とて名也九阜者く虚譽
 せられたる後此同書をよみ人高藤方策 名傳 字亮又 親看松齋 が譯する不偏
 も其技と與鳥不日とせよ行つて九阜其藏書の名一と示し又蘭書
 亦は優秀好又且兔園の冊もあつ事南の治癒の致し方業をよき種
 傳しとてこれを不偏和蘭方より書と著し並申ひ它日一後りて此

口角度首括 二二 井

信又ハ唯和蘭学の云々を答ひたり云々餘ハ焼くやの

諸器物の話

一 和蘭の人制器又ぬあり乃ふる云々

西洋製造の器天文戦陣の用ハ姑措く醫事ニ使用して甚勝ニ宜しき物
教多し以前よりカテイテルの薬液ハ此等銀を造る小便用或ハ石
淋あるハとある云々が時ニ陸軍ニ慕ふ者云々小便用云々百
治愈せず遂ニ死す者多し其の功効ハ外科ニ甚くして
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
て於て之の意甚むし云々云々云々云々云々云々云々云々云々
之の同志又ハ俗云々其簡ニ造る者も教多し此中云々人夫尚齋
名九 字執

中尚齋 蘭学ハ更なる産科ハ専門なればハハと醫術の意も究理して
其号 創意と云々事ぬ云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

らぬ意血云々を膿を吮ひく口の中へ膿汁の入らぬ意云々茶点の精液
を採る類若干種人の力も費さば云々小造化を成るハ器製云々云々云々

蘭人此を云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
明の仁有難と事云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

汗らんを言の鄙云々と瘳瘳機玉衡を制し云々云々云々云々云々云々
造るも留事云々研精云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

露灌ハ何方も焼炭云々と雲霞云々と人云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

井文堂藏

一、子あきも容易とあるは初と年六徳方と数寸あるは必ず硝子
 器世世の紫の物を紫火の執力に与るははらと薬料はとこの物を破き易と
 二、ある蘭人将軍のあいの物のほれた物を製して破るこりし事無
 し石膚の遠いあはれたるを錠の板に造る考へ申と左の料葉のたう
 精を板とくても其氣はとくあはれと薄荷精をたう其の硝子壺へ入を
 こをさつむきハ忽破るわうとてさう考へて製せし壺ハ及破きざれを
 それも又亦う板とわうといふもいと事世一

藥製の話

一、古乃ころころけひぬ同く茶をいろくと製し憂ひの事とていま事
 性のらう弱はうくはんやともなひ

茶製の事西洋人能くたるは僕人といろく精製して申の直性を純
 らゝぬるかへはとて又製らうと其力十倍とありといづれ
 彼をたあらあうも甚しくわうと究理の事とい事とおそそい蘭陳
 かし漢人をも使服用のこりい西洋人と此壺をく用ひくか多く使
 蘭陳よかざるずるは固有の壺氣あはれぬゆゑにふまも壺とく
 くるおまひる世お壺と揉んでまふがとていとては下蘭陳五苓散
 の疔脈具いする病人を治すは色い煎茶らう五苓も湯法もく在効力と
 左いす付蘭陳の分量はあはれ伍用あはれ傷寒論中の分量の通り伍用あ
 るう蘭陳質軽うかかるとなるとおなきは一點の分量はう格とありん水
 後てまひ世間第一七を加へ中俵のとおもへいそれとてハかくい分量

の通すありせむ病家の体面... 其外「セーロツフ」の製しぬおまき... 舍利別と書し局方發揮より出... 人參膏などの如く其葉抄煉... 能顔よの是も「ストポート」... かつよく長傍より得稱しぬ... 名よりとらぬるる糖... かくく免角言語傳つぬ笑る...

糖多きおは心ありそ... 爲河の糖まらぬ... 揚く知まひ漢人毎又氣附... 一羹湯のゆ... 唐山音を填め阿芙蓉... 「ち魚」に唱えり... 効能... 品のむを養へし事...

この世の道理よく研精あるはあはしく新出奇術もあはれく守秘せし
此の世の人の精を入る金に切角の政ある一思ひの心せし
とてしるすべし

藥品彼此有無の法 附五方差ひあるの法

一 熱病を治る西洋の「コルツ皮」はをさす所の要薬と承り此物
吾土の薬もよく稀なる一感よなき代り又使ひお
とせしむべし

「コルツ皮」の事 西洋甚稱一は志らんが事稀なる事 毎日服
文明の化行在とや金くひるは待く一を年の中からせつた
く多末の事といふ一又 五方差ひあるの法 文運

此の世の道理よく研精あるはあはしく新出奇術もあはれく守秘せし
此の世の人の精を入る金に切角の政ある一思ひの心せし
とてしるすべし
藥品彼此有無の法 附五方差ひあるの法
一 熱病を治る西洋の「コルツ皮」はをさす所の要薬と承り此物
吾土の薬もよく稀なる一感よなき代り又使ひお
とせしむべし
「コルツ皮」の事 西洋甚稱一は志らんが事稀なる事 毎日服
文明の化行在とや金くひるは待く一を年の中からせつた
く多末の事といふ一又 五方差ひあるの法 文運
此の世の道理よく研精あるはあはしく新出奇術もあはれく守秘せし
此の世の人の精を入る金に切角の政ある一思ひの心せし
とてしるすべし
藥品彼此有無の法 附五方差ひあるの法
一 熱病を治る西洋の「コルツ皮」はをさす所の要薬と承り此物
吾土の薬もよく稀なる一感よなき代り又使ひお
とせしむべし
「コルツ皮」の事 西洋甚稱一は志らんが事稀なる事 毎日服
文明の化行在とや金くひるは待く一を年の中からせつた
く多末の事といふ一又 五方差ひあるの法 文運

〇彼土は用ひたるも其法を其の事なりとなし。此は「コレは度」の
 ことを言ふ事なるも思ふに其の事なりとなし。内果の事且病論療法の
 ことを言ふ事なるも思ふに其の事なりとなし。先務の事なりとなし。
 〇此は「コレは度」の事を言ふ事なるも思ふに其の事なりとなし。
 〇此は「コレは度」の事を言ふ事なるも思ふに其の事なりとなし。
 〇此は「コレは度」の事を言ふ事なるも思ふに其の事なりとなし。
 〇此は「コレは度」の事を言ふ事なるも思ふに其の事なりとなし。

胃中燥屎を辨するの話

一 傷寒論は胃中燥屎云々をある事と蘭科家多し尿を腸中ふこそあ
 る事なり。田中燥屎といふ事あり人ありいふ事あり。適従と云ふ
 事なり。其の事なり。傷寒論は仔細あり。胃中及せし。せし。せし。せし。せし。
 其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。
 其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。
 其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。
 其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。
 其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。
 其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。
 其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。
 其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。其の事なり。

腑を祀し格々憶従とす顔面とあり守心筒と從倫の事ありありを
 外より腹部を伺ひ又俸部ある處の燥潤を乞察し又考ひそのあり
 ぬ蘭書中より便溲の事を此より解して腹泄と譯し又腹下と譯し
 俗人常々以て姑に事より之をわしめ不審と思ふ能通下
 えてはも腹の事よりとりも穩なきを伺ひ又大便の事より
 明らざるをとりて之の從同せる人を後より細く考へて
 能くわしめざるを過しとをわしめ論じ及ばざる此
 なるを水辨とて之を看之ありと一色角節事候察ありとぬ格々度
 察しぬるを傷寒論の域に入らぬ蘭科者流の好忌とすものを仲
 景氏なるを徴し乃其癰あるを吃せしめり事ありとありと蘭科も仲

景流も李朱家も取舍を其ふありとぬくぬ

鍼灸穴處の語

一むうより針灸穴處の名ありとぬ其針灸をわし書し其の穴は何
 陽何陰の種あり其へ針灸をわし其の種腑へ應じ其の疾病を治し
 ぬと譯し説にわしぬ副刺乃陰某の穴也某乃種へ應じ其驗を
 するものありとぬ

此事心の種に浮血の語の辭畧りあるも再考し之より鍼の事蘭
 人と毫針を用るるを毫針の披針とて浮血の事ハ種へ應じ其
 合谷曲池とて其處を分すし刺しぬ唯血脈絡の能く會せし
 所を刺しぬ其の事彼よりわし「モグサイブラド」の中より漢人の

く法疫病之冬とて事不承以腫為さるの星とあくるあたら冬に
 申信止 此方ハ大ニ効つる事ハ以テ中 け方近世大甚なり
 月二日冬とて一統をく無病の人を養育冬とてけ日物艾といふ未だ醫
 宿河村元東氏う著るる春韓政問答より朝鮮令を治せる言に彼は身
 揚州趙宗壽書けけるを治せしりて韓容呵々大笑しく故をの
 人きく公然とて其月を灼くあきし由その寧苦くまらんや
 下の法もなりあり事とて僕對州より東にむまの路に何
 物を肩より人丈の袒せしを祀る冬痕月は遍く一完膚をたあ
 心願を怪とて今此言をせし果て貴國養生子の法なる
 事とて其虚実を問ひて可醫を審めせし人をとて必死と勝

贖礼の事常規の如く人々をくも哀憫を勝んし
 くは足下が俗の深心なる事なく五禁の語を快社せし
 下の一身の事なく貴國の生靈遍く其賜を受むといひ一
 河合君のく處置せしきやとて此韓人の説も固かる
 陽春とてなれ京賦なる六射を擇むて冬とて二月も限る
 冬とて京法陽春徴とて病人もいひて傷寒論に
 冬を實の二字得火を後の眼目を韓人本論ハよまらるる
 冬を夫せしりて西洋のく沙羅士 吾國も冬ハ冬ハ試
 強き色も官に拘りて流るる定心を指さるに世の間
 冬とてあつた人ハ臍のけいも冬とてあつたに洋をく躍跳させ

うらなを指さるるに人申水清きと名を示さんハ鼻の口より
 か簡めく之を易し又病家より某の兒と名をさるるに云々
 所をさるるも拙きに似るる宛名あり教も嗚呼と云々
 甚煩わしきと一部位を教名と云ふその身一面國に名を施さるる時場而せま
 一に二とありてこれれまを云々まをせしを云々名を施さるるも云々
 相利皮親肉の腫脹人宜は名を施さるる其肉絡を透す其某の腑
 後一愈とるるといふ絶く清らに徒然と云々なるのそと云々
 る後一後考を俟り其名字を釋せる事ありんとなんといふ
 今又云々と云々といふ部ハ云々をりて名づけりて此をりて名は多
 世後湯又敷きけるハ大意の云々も細く釋し難く古人誰か
 名はけ初しや云々といふ人云々あるに定まらざるに書かす

あらんといふ國と云々といふ眞の云々といふ云々
 尋られざるに漢并ん中の宛名傳政ありて云々といふ人云々
 も計交傳考も云々名の考も云々いかに云々堀子の隨驗通考も云々
 釋名わりのキ名傳眼申の人云々尋も云々わりの書も云々
 かり云々もわりの世傳と云々云々云々業料者流に云々を付論せ
 一は唯神經の根と云々云々云々云々云々云々云々云々云々
 椎骨の正隙より神經左右と云々事なるは其つらに云々
 又云々云々云々今世間通と云々云々の論七九の論云々脊骨を考
 へ云々云々也云々守りて云々云々椎骨の云々守りて其云々云々の
 骨の如くわりの骨の如く椎骨の骨の如く云々云々云々云々

海に流しおとすあつたへう
 各處者流に推せ月と遊ばし
 世にわく宛處を宛て索あつたへうと待ちあつてもまあ双食の後より
 ち馬志といふるもそれと野味の推せ月にて彼普通の指
 へるも待つ繞るもあつたへうへはまのあつたへうのあつたへう
 ちるもあつたへうにあつたへうとそれバ銃を射るの事さく皮を論
 いつたあつたへうをを捕獲の馬月人馬月は方舞さつ推せ月をさつたへう
 改蓋面腮四肢よりさつたへうを集めて土井を埋む事五箇月を推
 へし能あつたへうを眞事と防せどよさるるももちかたを改築
 乃眞又借あつたへう

蘭説教員字狀乃語

一 和蘭治病の事 毎講の漢人著作の醫書あり古来河病
 乃治療も亦相違これありた今又西洋料を受まひハ費
 せまよハすハ期ぬるの類は皆ち下へ
 水乃水むよ不備も向いとも是下の如くありて西洋料ハ病となせ
 ちあつたへうが角びありち下向いも和蘭の言もまもすの
 聖賢の教よかつたへうも世老流も文のまも二二三を問其まも
 漢人のいぬるもまも一ハ内事の二の漢人の憶想の記も大相
 違も治癒を補助とわつたへうもまもあつたへうもわつたへうも
 隠行はつたへうのまも北の西洋内景の事南を捷徑の一事をわつたへう
 友の毛角南南とわつたへうもハ足るまもまもハ美観とわつたへうハ

る人をもく内事の事も使せを竟つて乗元あつた跡をいふ
惟くわくせんといふ事をもく内事をもく内事といふ事あり

解體諸書目の話

一 あが國あつても解體の書あつて刻し西洋の使つてあ
達もあつたや又なひあつていつくや

はる由縁と解體と著書せる人あつた由縁と福せしもの
くは論とそ可名と論と事をもく内事をもく内事といふ事あり
清水清助氏あつて和蘭内事の書あつた由縁と生れ福せし
神話世にあつてあつた由縁と崎港の茶賣しあつて其可名と事
福と校しと刻しとせしと托しとん任せしと行所と事もあり

あつてし生れあつて寛裕の生れあつてあつた由縁と事あり

しつ草創の時つてあつた由縁と事あり

乃眼を定めて究理とつて端を定められあつた由縁と事あり

淳号崔 不倚の姻縁と公績をいふと浪速不倚の寓しあつた由縁と事あり

解利せし一事とつて後解體瑣言を著刻し贈る書

中名偽が寓しあつた由縁と事あり

其書言ふ不倚と後と譚せしと題吾せる事もあり

方竹山先生の門人也醫事ハを頼りて批評するあり他日一説に入る

べし伯方氏年而多しといふこと世に志源く不倚かと常に往來して付

論を傳いんと一大志を成とつて蘭科の事ハ橋伯敏夫尚齋齋方策にぞ

毎二講究たる傳を七年の交わう〇何れ解儀乃書を蘭書中よりあつる
 この用をたす事として思召は洋人著作の圖繪せしもの久しく眼中
 入る三焦を名あうと取まゝとらふ物こそ一索め感ひするあそ大息す
 べりき 友人橋南銘傷寒外傳 秘書と其國画を看ぬ師又徒しく訊問ある
 魚一黙於みく研究あるも其以其敢容よを遠ひあるとも情欲飲食生氣
 あるもの日用をたすの具あつと凡例を申さあつ下一擅ち又人屍を親
 ざる所憾と魚いゝるを以不偏謹で透天下の人又一言りて交は解儀
 能一車西洋書を備論一黙於を剛刷して飽まぐも其理を窮めし近
 蘭書譯めしうううく甲も解儀を解ししも軟肺を復く令復せしこと
 べし交早の事人屍を屠殺する事ハ欲せぬも定一かゝる心とかな以透西車

二用とせんともは黙於みく事とすりて此事不傳 天地の交ひて
 ひくも交なる以董吻兒曹人屍を親する人ハ劫されく黙於をそののみ
 二ハ用を深とる事のは又思ひいらく需めく止すれ不傳も嚮時世奉
 又苦しこりにお自れに之親り以る餘人の親るを止むるうと儀しりさ
 るへくくとも左極ふくハ書と正公正を以苦りをもく以是下達云
 正と交を以て書とあはるべし

華佗剖心話

一漢の末華元化あつる腸を洗く心儀を換へしまどり傳へてある
 人の尸を世華佗が術西洋へ傳りしものさうことりあそ透たがた
 安ん哉

漢の末ハ今より五六七百年の阿蘭の國も千七八百年の事
 きと華佗の術彼土へ傳りしと附會せしものも或はハ人も志
 べうしげ佗が技の事嚴安常が以て史の妄とせしものも夏竦堅氷
 をえざらん同となく勝を漢の事銘らからんは或はより通カリ
 ステルハ浣腸法も肛門より毒を射こみし勝の事を漢の事俗
 人卅勝の字を腕腑と看執しし奇術と思ひし事且唯文字の通カリ
 と水きりあはるべし浣腸とて體非ハ勝をひれ出し漢の事あはるや
 換心の事ハ弟倚背ハ心は心臓の傍ト入ノ通意後ハ心臓
 の大官徳とあはるバたは換へばとも凡人の妻と驚きしは信
 ひおまはるまの唯華佗の術を辨せんし史家の學も母せし
 一必寧の事ハ思ふまじくみそれしハケイナルレーキス子ト
 中島の後まじみられハ妊娠條月もあはるも産の事トても產出とを
 術もおよそ流を流めくおけとを流死ししものたり其時母腹を截り
 ころ鬼をとりし痕を癒あはる母を助け死せざらんむの術あはる
 然るは西洋むりハけ術今りすこと其母を救ひし鬼の生死を問ハ
 ざうしは近きるも母も鬼も両あはる術ハさぬハ庸工なりと愧
 ハ中其術之利カをもつて母の肚腹を截り両通しけられし裏はあ
 する宮を截り世討る宮皮内ハ神經よりわらぬ胎子又胎子の某の處を
 某に在るを執りて截り鬼を流し其創痕をぬく某を傳け又母肚
 乃刃を避し創口は蓋を貼る事あはる術甚精敏捷なりとされ

一必寧の事ハ思ふまじくみそれしハケイナルレーキス子ト
 中島の後まじみられハ妊娠條月もあはるも産の事トても產出とを
 術もおよそ流を流めくおけとを流死ししものたり其時母腹を截り
 ころ鬼をとりし痕を癒あはる母を助け死せざらんむの術あはる
 然るは西洋むりハけ術今りすこと其母を救ひし鬼の生死を問ハ
 ざうしは近きるも母も鬼も両あはる術ハさぬハ庸工なりと愧
 ハ中其術之利カをもつて母の肚腹を截り両通しけられし裏はあ
 する宮を截り世討る宮皮内ハ神經よりわらぬ胎子又胎子の某の處を
 某に在るを執りて截り鬼を流し其創痕をぬく某を傳け又母肚
 乃刃を避し創口は蓋を貼る事あはる術甚精敏捷なりとされ

施しつゝ樹たるのめく母乳もみ生法させはしめて良薬と稱
 せしむるの世樹の試みる人もなれたる吐腹を截ちしものを
 事も最易と事又の官を截も胎児の碍らざる其神経を問ふ
 るたれども其精察せば胎皮より胎をまざるのありたるの胎皮因
 ち二三龍石の研精せば世樹の難と事もあるも胎を治せんと
 遊死をぐし進も死を命生れに死せん六治に死しと死おとあ
 飛去世樹 官許をば撮りしはつゝあつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 へ後世のつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 胎皮肉のうちにあつゝ神経血路もに其端と端と合ふ處を合
 せしむるに附着しつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

かつこれ神経をもあれ絡の端に處にあつゝつゝつゝつゝつゝ
 ぬひ又を瘡口に薬膏を傳けてあつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 ぬんぬんぬんぬんぬんぬんぬんぬんぬんぬんぬんぬんぬん
 是れをまじり書中極心洗腸の事もええ他が術今も傳りつゝ
 考ゆつゝ思ふも此を歎息致しあつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 ハ溜る皆信どぐ其毒の其用は適り何ぞ蠻夷の術を鄙む
 真龍よあつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

阿仙薬の話

一 阿仙薬のつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 此土にもつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

百葉煎ひやくやせんと論説ろんせつせしいうわゆるおとくひ哉いかん攻こうもきくひ也なりもあくば承安じやうあんひ

先年せんねん插林さつりん九阜くふ又醫話いごせし時蘭じらん稱なづカツテウスかつてうすと申まを申まをれりふくひ哉
と尋たづひぬカツテウスかつてうすと呼よびふくと曰い授まけりしひ名な係けいひさしき世よ世よお州しゅう
ラタマルバルらたまるばるの地ちよりあつと佳よくと今いまサルさる亦また様やうと唱なひを接ま胞ほうと
お書かきと申まをなれども其その裁さいサラタマルバルらたまるばるの聘へい礼れいあつらんやもきく
すべイステルベツアルいすてるべつあるをバコイサラバサラばこいさらばさらまど聘へいく礼れいりふきくひバ
其その於およもやしなひ世よ世よお一いつ種しゆの本ほん於おきく製せいとてし阿あ葉えの地ちを其その樹じゆ
きく他た邦ほうよりの本ほんを申まをおすひひ日ひある蘭らん書しよを譯やくししり并ならひ世よ世よお本ほん
を申まをししり日ひ本ほんの製せいとてカコウかこうあつり樹じゆの姿すがたをとりて砂さ糖とうを加くへ授ま

耐たき製せいししりああのより及および我國わがくにはカコウかこう木きと申まをるの承じやう傳でんく

りりりりあある係けい甚しん艱がん金きんしり後ごとてい係けい人にんを五ご倍ばいふふ製せいとてしり
いり 吾國わがくに泉州くわんしゅう東府とうふはゆるく見みを製せいとてしりあ
五ご捕と子しををももとと申まをる人にんのあつとてしりあ五ご倍ばい子しと蚊あし子し木き実じつと甚しん肖せうと

およひしりや世よ世よ実じつきく製せいししりもあつり蚊あし子し木きハゆゆと申まをる樹じゆあつり俗じやく

又また瓢ひょうの木きと申まをるおよひ 泉州くわんしゅうの方言ほうげんよひひ火か除じゆ
ちり 檣じやう代だいろとて火か災さいを防ぼうぐぬがす 其その実じつ中ちゆうよ

り蚊あし乃なり子し出でると申まをるおよひ中ちゆう古こ歐おう羅ら巴ぱ人にん船せん来らいせしり口くち授ま乃なり付つ此こゝ実じつ城じやう
指さしり蚊あし子し木きといひしりを譯やくし授まけしり蚊あしハ蚊あしかかり子しハ子しなりしり傳でんし

り日にっ本ぽん稱しやうカコウかこうわつしり思おもひ再また傳でん轉てん礼れいしり名なもや憶おぼ後ご後ごもきバ法ぽう
りり愧かへひりしり後ご考こうの種しゆもと一言いつげんを費つぎしり一いつ名なあつりり

益田 賤軒長崎へりて一討其地乃清水槐葦なる處其地 後明浪速に寓
 の中時述せる傷寒正氣傳に以て清人抗州宋大庸が批點小註
 跋あり是汪竹里なる清客を介して成まると竹里が跋も此を上本を
 了事を益田に托してその名偽が富し持して吾子が投正を然とす
 此宋氏が跋語中國醫書を著するの素靈を改まり戴うざるの故を大略
 令より禁して刊を免さば然をもく久習を正し以て事をば今海の東
 しかく乃づくとこれと同意の人あるを去る為にあの趣あり此其門人
 田中良仙 再不偽と復して投正與うむ且不偽が一跋を添へる日
 荻府 医官 刊せむ世よあし一右の如く素難の如く微一の確ありて是禁
 此國なりきバたしく先賢未及の確論ありとも國禁を擁護せしめ行

は多し事ありあつたし風習なるも 皇國の今此禁をなすゆゑ方古
 志まざる事ありあつたし 國恩を以てす
 目 此土の人ハ如く富むるを文章以て雄英の人輩とす就
 中今 昇平の時より法を以て興起を蘭科の事も 禁むる色ハ研
 精を以てする事ありあつたし此時を以てあハせて免くする事
 得るは能くせりしを以て是れを以て富むる美むる堪へるは海土のあつた
 論博く看傍蘭科の事も効めありあつたしあれども偽る煙の酒を以て
 かく井部察壺の酒を以てバ肯くするに由りてハ此乃大禁を多し
 此次は後より之を彼土の治癒法いろいろと申す中投正杖とすハ

袋の中へ茶葉を入き胸腹へ當りて飲んて首飲を治し胃消化を促し
 此法ハ茶を焙りて傳けあらしむを常とす搦して殆ど内傷の病を徹し
 此法ハ茶を焙りて傳けあらしむを常とす搦して殆ど内傷の病を徹し
 暹羅法も亦き同く煎泡法を漢人も為 此土も此法をす口又ハ口
 辺へ傳法をすかゝる方あり亦きも蘭人乃法を斑猫をたぬ成るなど
 種々乃煎泡法ありてまはしりて奏効ある方ともまはしりて亦き等外あり
 治する方なれども外科の用のまはしりてありて内科も亦きとありて
 らる事ともみん 建法水治蒸慰法麻木法 漢人の小説に出たる蒙汗茶
 亦きい何事あり かの事法ありて病むの道理を考へて
 ハーく數百千種の茶葉を覓るふも及まじき事 帆夷人病ある時をイケ

「蘭人メコアカシとエツリヨ」一名トウボシニ其の三種をのを用かき法を
 究竟三品とも勝を相通するのおぼなれを何の病も治する道理あり
 べしむろし申張の徳本翁がいひしごとく見書も常みはよしきし腹
 ハぬけ通すのおかし 其中へはるるも磁滯を去るは病を發せしむ
 はりても勝をうく通するの茶法を用ひてはるる一概の論の極
 たりとも世に古醫の流に教をばし帆夷人と肉食のこともなれを勝
 常事なりしんそれ又平食なれを 此の人々を迷ふる事あり 皇國
 此法方ち多しとせん民間に傳りしおかしき方ありしんはるるは
 此の人々を迷ふる事ありしんそれ又平食なれを 此の人々を迷ふる事あり 皇國
 此の人々を迷ふる事ありしんそれ又平食なれを 此の人々を迷ふる事あり 皇國
 此の人々を迷ふる事ありしんそれ又平食なれを 此の人々を迷ふる事あり 皇國

加々木... 其任の年月も... 一後あ... 世方の武... 其任を... 丹後ま... 仲景を... 傷寒論... 作者み... 自正を...

も眩せ... 倫乃一書... 一問然... 吐一和... を示一... 痛を癒... 其土又... 蘭醫... 譯... 載... 敬... 信...

三ツの支那一返りて其書難讀故已ニ遇ひて其困難を後とす
 其書は支那の脈二約一修るの法ありと稱譽したるを認めハ此人も吾寺の
 佛より一これ思ふ固我の私心を死人とせざるありあまの公平の人
 又世論を著し一めたるは必賞讃を乞ふ不偏が涉穢せ漢人の著書中一
 言し仲景氏の論を排斥せしを看んたるを以て世中の教を乞ふを著し
 漢人後漢の醫書幾教百を皆此傷寒論を註せしものなりと名ひ不偏が
 著し世を事瘳たりと云ふはひりり下又是を著し下士の瘳たるん
 今日と語世より輟免後日を約して申候
 和蘭醫話下之卷大尾

和蘭醫話の二本奥書家の漢多し書損甚し校々を懶く且故りて奥書の
 儘と刊と看官これを海慈一のり
 萬町權之進著述
 嘉嚮書局藏

和蘭醫話 二編 同 三編 嗣出

和蘭簡方 同 嗣出

文化二年十一月

皇京書房 巽 佐右衛門

山口又市

浪速書房 田原平兵衛

上田吉兵衛藏

